

木造近代建築の保存と活用－木造校舎の保存活用の成果と課題

於 京都工芸繊維大学 60周年記念館大セミナー室

2017年7月29日（土）

参加報告書

林 晴信

2017 第 1 回 「木造近代建築の保存と活用—木造校舎の保存活用の成果と課題」

日時：2017 年 7 月 29 日（土）13 時 30 分—

会場：京都工芸繊維大学 60 周年記念館 2 階大セミナー室

京都市左京区松ヶ崎橋上町 1（京都市営地下鉄松ヶ崎駅下車徒歩 10 分）

定員：90 名

入場：無料（申込不要、当日先着順）

主催：京都工芸繊維大学大学院建築学専攻

京都工芸繊維大学 KYOTO Design Lab

後援：DOCOMOMO Japan／日本イコモス国内委員会

プログラム

13：30

挨拶 | 田原幸夫（京都工芸繊維大学 KYOTO Design Lab 特任教授）

13：40

西脇小学校の保存再生：足立裕司（神戸大学名誉教授）

14：30

日土小学校の保存再生：花田佳明（神戸芸術工科大学教授）

15：20 休憩

15：30

木造近代建築の保存再生と構造家：腰原幹雄（東京大学生産技術研究所教授）

16：20

座談会 木造校舎の保存活用の成果と課題：

足立裕司＋花田佳明＋腰原幹雄＋田原幸夫＋笠原一人（京都工芸繊維大学助教）

18：00

講師・参加者による懇親会 | プラザ KIT（会費制）

概要

京都工芸繊維大学大学院・建築都市保存再生学コースの保存再生学シンポジウムも 3 年目を迎える。今年度の年間テーマは「木造近代建築」に設定した。ここで言う「木造近代建築」は、伝統工法による神社仏閣や民家、近代和風建築は含まない。20 世紀に造られた公共的な色彩の強い、比較的規模の大きな木造建築を対象とする。その第 1 回として小学校の木造校舎を取り上げたい。

日本の学校建築における過去を振り返ったとき、木造校舎においては多くの試練があった。その一つは“不燃化”という問題である。学校に限らず、歴史的建造物の保存においては常に、安全性の確保と歴史的価値の保全がぶつかることとなるが、学校建築においては国の“不燃化”という基本方針のもと、多くの優れた木造校舎が失われてしまった。現在、文部科学省が「木の学校づくり」を推進している状況は皮肉と言うしかない。また建築基準法の改正によって、新築の木造校舎実現の可能性は広がりつつあるが、失われたものは二度と戻らない。

今回のシンポジウムでは、苦難の歴史を生き延び見事に現代の小学校として甦った、兵庫県の西脇市立西脇小学校（1937 年竣工／内藤克維設計）と愛媛県の八幡浜市立日土小学校（1958 年竣工／松村正恒設計）の木造校舎に焦点を当てる。戦前と戦後の木造校舎の傑作であるが、いずれも解体の危機に瀕していた。しかし関係者の粘り強い活動により、保存再生が決定した。その保存再生に関わった専門家をお招きし、木造近代建築を過去から未来へと繋ぐ意味と可能性を探る。

所感

実に興味深いシンポジウムであったように思う。私の第一の目的は「西脇小学校木造校舎は改修後、いかにして文化財（リビングヘリテージ＝生きている文化遺産）にすべきか」だったのだが、話を聞いているうちに、目的を忘れそうになるくらいだった。

現在、改修中の西脇小学校の木造校舎も、いろいろ問題が起きていることも、足立教授の口から直接聞くことができた。一番の問題は、入札不調を避けるために材料部品を極限まで削り、単価に余裕を持たせて入札したところ、思いのほか低入札という結果に終わり、それだったら、設計段階であんなに削る必要がなかったと後悔している点だという。つまり、今のままだと、文化財まで見据えたきちんとした改修は難しいとのことだった（学校施設として機能を維持した単なる耐震改修しかできない）

他の先生方も仰っていたが、文化財などの改修工事は現場での設計変更などは当たり前で、建築物と対話しながら改修を進めるのが常とのこと。

今だと、低入札のお陰で予算もキツキツなので、変更ができないとのことだった。

また現段階でも現場教師から「こういう風にしてくれ」との要望があり、その調整にも頭を悩ませているとのことだった。例えば、中央廊下はバリアフリーのため全体が緩やかなスロープになっているが、下駄箱付近もスロープになっており、「それでは子どもが靴を履き替えにくいので平らにしてくれ」とか、「教壇は危険なので無くしてくれ」等。

花田教授曰く「篠山小学校では教師からそんな声は無く、緩やかな雰囲気ですら改修させてもらったけどなあ」だそうである（歴史文化を大切にす土壌の違いか）

余談になるが、木造校舎でよく言われる音の問題にしても、「どんな細工をして低減したところで音は下に響く、しかし下に響くから上はドタバタしないように！」というのが本来の教育ではないのか」と嘆いておられたことにも全く同感である。

つまり、設計変更に伴う予算の増額を認めて欲しいというのが足立教授の仰っておられたことだった（当初予算の12億くらいまでは上限で余裕がほしい）

後のパネルディスカッションでも話題になったが、こういう文化財の改修と「入札制度」というものに親和性が無いということだった。

実は西脇市の実施設計時の入札でも問題が起こっている。

当初入札で落札した業者は、西脇小学校木造校舎など見たこともないような業者で、落札した後に難しいと判断したのか、僅か1週間後に辞退。再入札となっている（余計な手間暇がかかった）

花田教授の手がけた日土小学校（国重要文化財）でも、同様のことが起こり、設計は当初から関わった日本建築学会四国支部だったものの（これも同額入札くじ引き落札）、監理が別の業者に落ちてしまい、仕方ないので市は別枠の予算を組んで日本建築学会がサブで監理を行った（実質はメイン）事例もあったという（つまり余計に金がかかってしまっている）

そのことがわかっているのに、篠山小学校の改修では随意契約をしている（議会からかなり叩かれたそうだが）

また、足立教授からは再三に渡り、教育委員会に対し西小PTAなどとの懇談会の申し入れをしたそうだが、なかなか実現しないことに対する不信感（？）も露わにされていた。

篠山小学校ではPTAとの懇談などの連絡は密にとって改修を進めていたというのとは大違いなのが私も大いに気になったところである。

さて、文化財の話であるが、日土小も同じく国重文になった高野口小にせよ、まず市の指定文化財から始まっている。

これをすることが先決であるし、足立教授もそのことは心得られているので一安心はしている。次の段階はどうなるか、であるが、前述した予算の兼ね合いもある。

また復元をどう行うか、という問題がある。

その辺りは足立教授の専門分野でもあるので期待したい。

今は当初の瓦が何色であったかが判明しないそうだ（当時の写真も白黒）

現在は青色の銅板葺き、私が通っていた 2000 年改修以前は赤色のスレート瓦だった。

その前がわからないので、これも神戸大学の調査力に期待するしかない。

R C 棟（北校舎）と外構の予算がほとんどついていないのが情けないとも仰ってました。

特にプールは何とかしないと、子ども立場からしても許せないだろうと嘆いておられたのが印象的でした。

また R C 棟にしても木造校舎に比して「要らない」という意見もあり、確かに建築的にもどうしようもない建築で、誰があんな設計をしたんだとも思うが、昭和 45 年の竣工からそれなりに役割も果たし存在感も示しているとのことで、それをどう活かすかを考えることは必要であり、それで昭和 45 年竣工当時に祝った人の思いもくみ取れるはずだと仰っておられました。

足立教授曰く「古いデザインに新しいデザインをつないでいく」「空間をデザインするから時間をデザインする」とのことです。

「2階渡り廊下も文化財を考えれば無いに越したことは無い。しかし、車椅子の子どもが自由に行き来できる環境を確保するのは今では常識である。それを実現するためにどうデザインをしていくかが重要。保存のためにはアレだめコレだめではなく、攻めの保存活用ができなければ、保存活動もジリ貧になる」と強く言われており、私も納得できました。

また同じように腰原教授も「耐震補強は我慢するものではない」とのことです。「もっと適当な改修があっていい。このまちのここに、こういう建物があって、こういう風に使いたいんだという改修があっていいのではないか。腫れ物に触るように、何かおずおずと改修している気がする。こんな活用がしたいからこんな改修してほしい、という意見があって、それからその改修が建物の価値を下げるのかどうなのかを考えればいいのではないか」とも提案されていました。

江戸期までの木造建築については保存改修方法も確定してきているが、近代建築遺産としての木造建築の改修方法は確定しておらず、建築家が頭を悩ませながら改修プランを練っているような状況にあるようです。

花田教授も「日土小学校も重要文化財になろうとしてああいう改修プランになったわけではない。建築物と対峙してじっくり観察して考えると最終的にああいう改修プランに落ち着いた」と仰っておられましたし、足立教授も「建物と対話していく中で、改修していく中で、評価が定まり、あるべき改修に落ち着く」と仰いました。

そうすると、西脇小学校の保存改修工事の入札は終わっているけれど、本当の意味での改修を施そうとすれば、設計変更に伴う予算増額措置（ありていに言えば補正予算）が必要になってくるのではないか、と思った。

その場合、市民はどう感じるのか、理解できるのか。

また市長の判断は？また議会がどう判断してゆくのが問われるとも思った。

※シンポジウムについては他に色々興味深い話も聞けたが、この報告書では西脇小学校に限って書かせてもらうことにした。